

令和 3 年 6 月 18 日現在

機関番号：13401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23337

研究課題名（和文）国語科における「語彙学習力」の育成-学習者視点からの語彙単元の開発-

研究課題名（英文）Development of Vocabulary Learning ability in Japanese Language - Vocabulary Learning Unit from the learner's point of view -

研究代表者

萩中 奈穂美（HAGINAKA, Naomi）

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門（教員養成）・准教授

研究者番号：40851712

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：「語彙学習力」育成のために、表現学習において体系的な認識を獲得させる語彙単元を開発し、指導のあり方を考察した。重点を置いたのは、語彙の体系を学習者が作り上げること及びそれを具体的な表現対象と照らしながら行うことである。

その結果、語彙の体系を可視化しながら作り上げること、また、文脈を体系化に生かし、その体系を表現に活用させることが、語彙への興味・関心、語彙使用の省察、語彙の価値等、すなわち「語彙学習力」の向上を促すことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

授業で指導対象とする語彙には必然的に量的限界があるため、自ら語彙を学んでいく力を育成することは極めて重要である。これは従前より指摘されていたが、実践レベルでの研究はあまりなく具体的には不分明のままであった。そこで本研究では中学生を対象に、表現学習を中心に据えた語彙単元を開発し、実践における学習者の姿をもとにその手掛かりを得ようとした。その結果、語彙学習力の内実と有効な指導方法についての示唆を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：I examined how to instruct students to understand meanings of words in a systematic way so that they can develop "vocabulary learning ability." The research focused on the following two points: first, I had students make a semantic network of words on their own, and second, I instructed them to keep in mind the context in which each word is used when they make the network.

I found out that through the experience of visualizing network of words, considering words in contexts, and utilizing the network in writing, the students increased their interest in vocabulary, became more reflective about how to use words, and realized the importance of vocabulary; my vocabulary instruction method helped them to improve their "vocabulary learning ability."

研究分野：国語科教育学

キーワード：語彙学習力 国語科 語彙指導 表現学習 語彙体系 使用語彙 類義語 中学校

1. 研究開始当初の背景

語彙指導は、「研究・実践研究が一般的に少なく、学校での取り組みのなさが目立つ」(井上2013)と言われ、現場教員の関心の低さも指摘されていた(矢部2007)。こうした中、平成29年告示学習指導要領において文部科学省から「語彙指導の改善・充実」が要請されたことを機に、国語教育関係の商業誌における特集や語彙指導関係の書籍の出版など、積極的な動きが見られる。現場でも少しずつ語彙指導への意識が高まりつつある証しともいえよう。

「学習者の語彙が貧弱になってきているのではないか、ぜひ豊かにしたい」というのは、国語教育に携わる者みなが抱いてきた思いであるといっても差し支えないだろう。しかし、学習者が知っている語句や使える語句を増やすというのが指導者の語彙指導に対する一般的認識であり、教材文に含まれる未知の語句をその度辞書で調べて短文づくりをさせる等の方法が定着している。このように語彙の学習は学習者にとっては受け身の学びになる傾向が強い。

語彙指導は、学習者が認識力や表現力、人間性を高め、言語生活を生涯に亘って豊かにする能力を育もうとする国語科において中核ともいえる内容を担う。一方で、教室で直接扱える語句には限りがある。そう考えたときに「学習者自身が自ら語彙学習に取り組めるようにするにはどのような指導が必要か」「語彙学習力」の育成のあり方」という問いが生じてくる。これについてかつて斎藤(1958)が「自ら語彙を習得していける能力」の差が語彙の個人差の原因と指摘した。また、田近(1981)は「自ら語彙を学び取る力をつける」ことを展望した。こうした指摘は散見されるが、そもそも語彙指導自体が必ずしも活発にされてこなかった経緯から「語彙学習力」の育成のあり方を射程にして取り組んだ実践的研究は見当たらない。生涯学習の重要性が強調されて久しいが、語彙指導にはこの視点が、必要でありながら弱いと言わざるを得ず、先送りされてきた問題の一つである。

一方、塚田(2005)は、「標準化された遺産としての言語知識を鋭意教化する」ような、「語彙習得のトレーニング」としての機械的なドリルの奨励を問題であるとして取り上げ、「学習者の側から発想する語彙拡充」の必要性を述べた。そのうえで、語彙の習得・拡充を促すには、学習者一人ひとりの固有の語彙のネットワークを記憶から呼び覚ましながらか、『再体系化』を促す工夫が必要であると指摘した。

こうした指摘は語彙指導における重要な課題の一つであり、現場がこの課題を乗り越えていくためにも語彙指導の実践的研究が一層求められる。この課題に関して今村(2017)は、「語彙を自分の保有している語彙体系に位置づけ、関係付けながら積極的に語彙獲得に取り組む子どもを育てる必要」を述べている。また知識中心の取り立て指導やいずれかの領域での取り上げ指導、言葉遊び等だけでは十分と言えず、これらを継続にしながらも「語彙単元」による指導を加えることを提唱している。こうした状況において、「語彙学習力」の育成のための「語彙単元」の開発や具体的な指導方法の開発に関する研究が求められている。

<引用文献>

- 井上一郎(2013)「理解学習・表現学習の中での指導の内容と方法」全国大学国語教育学会『国語科教育学研究の成果と展望』
- 矢部玲子(2007)「語句・語彙指導の現状と課題--小・中学校教師の意識を中心に--」日本国語教育学会『月刊国語教育研究』425号,pp.46-51
- 斎藤喜門(1958)「語彙教育の体系と方法(中学校)」『国語教育のための国語講座 第4巻 語彙の理論と教育』朝倉書店
- 田近洵一(1981)「語彙指導」全国大学国語教育学会編『講座国語科教育の探究1 総論・言語指導の整理と展望』明治図書, p202
- 塚田泰彦(2005)「学習者の側から発想する語彙拡充の方法」日本国語教育学会『月刊国語教育研究』No.394
- 今村久二(2017)「語彙学習の意義と役割」, 日本国語教育学会監修『語彙 - ことばを広げる - 』東洋館出版社

2. 研究の目的

自立した語彙学習者を育てるためには、学習者を受け手としがちな従前の発想を脱し、学習者自身が語彙の価値や必然性に気付き、意思をもって自ら語彙学習に取り組んでいけるように導くための指導の在り方を明らかにする必要がある。

そこで、本研究では、学習者の「語彙学習力」を育成するための要件を見出すとともに、それを生かして、学習者が語彙を核に探究する過程で、語彙や語彙学習への関心・意欲・態度を高め、語彙力を伸ばす方法知を身に付けていくような単元(これを「語彙単元」とする)を学習者視点から、開発し提案することを目的とした。

これにより学校現場に次のような面で貢献できると考えた。

- 「語彙と語句はほぼ同じ」「(英語のように)知っている語句を増やせばよい」と捉えがちな指導者の語彙や語彙指導に対する認識の変革を図ることができる。
- 効果的な内容や方法の語彙単元を提示することで、実態に合わせてアレンジするのみで過

大な労力をかけずに、「語彙指導の改善・充実」の要請に応えられる。

- 指導者から与える発想のみの指導者が、学習者自らが語彙を豊かにしていく導きとしての意義を語彙指導に見出すことで、語彙学習への学習者の主体性が育まれる。そのために、具体的には次のような内容を研究しようとした。
 - 先行研究を踏まえて、どのような力をもって「語彙学習力」とするか。
 - 学習者（特に中学生）は言語生活上どのような場面で語彙力向上の必要を感じるのか。
 - 学習者の語彙へのイメージ形成をどのようにして促すか。
 - どのような語彙を題材とすることが語彙への関心を高めるのか。
 - 「語彙単元」の構想ではどのような言語活動に取り組みさせることが有効なのか。
 - 学習者主体にするにはどのような学習過程をとるか。個人や集団で何を考えるか。

3. 研究の方法

(1) 先行研究の検討

戦後の国語科教育における語彙指導研究を文献調査によって概観した。その中で、本研究における「語彙学習力」に相当する「語彙を自ら学習し獲得していく能力」に関わる言及を洗い出した。国語科教育関係の事典類、語彙指導の研究書や雑誌の論考などを確認した。その中で、以下において言及が認められたため、当該研究ではこの能力をどのように認識しているか、その育成に関してどのような考えを表明しているのかを整理した。

田中久直(1958)、斉藤喜門(1958)、中沢政雄(1961)、平井昌夫(1961)、安達隆一(1973)、浮橋康彦(1977)、倉沢栄吉(1974)、長谷川孝士(1978)、鳥居一夫(1978)、吉田公夫(1978)、輿水実(1979)、野地潤家(1980)、福沢周亮(1981)、大越和孝(1981)、林四郎(1982)、大村はま(1983)、菅井健吉・湯沢正範(1988)、甲斐陸朗(1988)、浜本純逸(1990)、井上一郎(2001)、塚田泰彦(2005)、山本建雄(2006)、安居聡子(2011)等

(2) 仮説の設定

(3) 研究実践における学習者の学習成果物の分析

対象とした実践 A 平成 30 年 5～6 月実施 T 県 T 中学校第 3 学年
B 平成 31 年 5～6 月実施 T 県 T 中学校第 3 学年

記録物 ・ 学習指導案
・ 授業の音声や映像
・ 授業で用いた資料
・ 学習者のワークシート（作文、言葉マップ、振り返りシート等）

これらをもとに内容によって分類して集計、質的分析、個別の学習者の変容分析等を行う。

(4) 分析結果の考察

(5) 研究発表に向けたまとめ

4. 研究成果

(1) 先行研究の検討から明らかになった「語彙学習力」育成上の課題

語彙を自ら学ぶ力の育成の必要性については従前から指摘があるが、「語彙学習力」「語彙習得力」「語彙獲得力」等、用語そのものが定まっていない。内実にも揺れが見られ、語句を類推したり辞書などを用いて新語を獲得したりする力に重点が置かれていたが、「新しい語を獲得していく力」ではなく「自分のなかにある語彙をより確かなものにしながら、次々に新しい語を吸収することによって、一層豊かなものにしていく力」だと「発展性」が重視されるようになった。一方では、語彙への意識や無意識的な語彙習得の方法への自覚を強調する提案や、自然発生的には拡充しない語彙の習得には「訓練」が必要との指摘も見られた。いずれも重要な見解だが、現在のところ内実は不明瞭なままである。

(2) 「語彙学習力」の育成のための有効な指導方法（中学生の場合）

表現学習の中で語彙について体系的な認識を獲得させることが「語彙学習力」を育む基盤を形成するという仮説のもと、指導方法について実践的分析考察を通して明らかにした。その結果、指導方法について次の可能性が示唆された

表現場面で自身の語彙への課題意識を明確にさせることで、語彙学習の必要感が高まる。表現対象と照らし、自身で語彙の体系作りを行うことで語彙の体系的認識を獲得する。体系作りでは、語句を可動式にして位置付けたり複数をもとめたり結び付けたりして思考操作を可視化すること、見出した語句相互の関係を言語化することが有効である。さらに協働的な体系化に個人での活動を挿入することは、語彙の固有性に応じる上で意義があると同時に、体系化の技能も身に付きやすい。また、語彙への興味・関心の高まり、語彙の使用傾向の自覚などにつながる。

表現学習において、具体的な表現対象と照らしながら語彙について検討することは、抽象的な存在としての語彙体系に具体性をもたせる効果がある。

作り上げた語彙の体系と体系化の過程で働かせた思考は、語句選択に活用される。文脈に照らして体系化し、その体系化を文脈に生かすことは、語彙の価値への気付きを促す。語彙に価値を見出すことは、語彙を学ぶ意欲、さらには意志を強くする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 秋中奈穂美	4. 巻 89
2. 論文標題 「語彙学習力」育成のための実践的研究 表現学習における語彙指導の意義と方法	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語科教育	6. 最初と最後の頁 12-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20555/kokugoka.89.0_12	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 秋中奈穂美
2. 発表標題 国語科における『語彙学習力』の育成 - 語句を捉える観点を豊かにする指導 -
3. 学会等名 第137回全国大学国語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 秋中奈穂美
2. 発表標題 語彙的な発想を用いた詩の指導 - 感性的思考と論理的思考の補完によって想像を促す -
3. 学会等名 第58回国語教育実践理論研究会研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 秋中奈穂美
2. 発表標題 言葉への意識を育てる語彙指導
3. 学会等名 一宮市国語研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 国語教育実践理論研究会（分担執筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 6 / 159
3. 書名 言葉を磨き考え合う授業づくり	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------